

## ドストエフスキー『罪と罰』について

### 1 ドストエフスキーとは

本名フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（1821年～1881年）。24歳のころ自身の処女作『貧しき人びと』を発表し絶賛される。やがてミハイル・ペトラシェフスキーが主催する空想的社会主義サークルと関係を持ち秘密出版所設置計画に加担したため、1849年に逮捕され死刑判決が下るが、処刑の直前に特赦が出され、懲役4年（プラス兵役勤務）、シベリアに行く。この頃思想の転換が行われ、西欧的理性に基づく革命を否定し、キリスト教による魂の救済へと転向したと一般的に言われる。また賭博好きの一面があり、借金の返済のために無理な契約をして締め切りに追われながら作品制作を行うことがあり、ここで扱う『罪と罰』もその一つである。トルストイと並ぶロシア文学の巨匠かつ世界文学の最高峰である。（新潮文庫の作者解説などを参考にした。）

### 2 『罪と罰』あらすじ

鋭敏な頭脳を持つ大学生ラスコーリニコフは、一つの微細な罪悪は百の善行に償われるという理論の下に、極悪非道な高利貸しの老婆を殺害し、その財産を有効に転用しようと企てるが、偶然その場に来合わせたその妹まで殺してしまう。この予期しなかった第二の殺人が、ラスコーリニコフの心に重くのしかかり彼は罪の意識に怯えるみじめな自分を発見しなければならなかった。不安と恐怖に駆られ、良心の呵責に耐えきれぬラスコーリニコフは、偶然知り合った娼婦のソーニャの自己犠牲に徹した生き方に打たれ、ついに自らを法の手に乗せる。→ロシア思想史にインテリゲンチヤの出現が特筆された1960年代、急激な価値転換が行われる中で青年層の思想の混迷を予言し、強烈な人間回復への願望を訴えたヒューマニズムの書として不滅の価値に輝く作品である。（新潮文庫のカバーの作品紹介から）

### 3 登場人物紹介

- ・ロジオン・ロマーヌイッチ・ラスコーニコフ：本作の主人公。鋭敏な頭脳を持つが金銭面の事情で大学を去った「もと大学生」。独自の犯罪哲学や思想を持つ。
- ・ソーニャ：家族のために自ら娼婦となった信心深い少女。殺人を犯したラスコーリニコフに、信仰による自己救済と自首を促す。
- ・ポルフィーリィ：老婆（アリョーナとリザヴェータ）殺害事件を担当する予審判事。ラスコーリニコフを真犯人だとにらんでいる。
- ・アリョーナ：高利貸しの老婆。貧乏人を食べ物にする悪辣な人物として、ラスコーリニコフに殺害される。
- ・リザヴェータ：アリョーナの妹。心優しく信心深い姉にいじめられる。たまたまアリョーナ殺害現場に来合わせ、殺害される。
- ・ラズミーヒン：ラスコーリニコフの友人でよく彼の世話を焼く。地主のせがれ。出版社の創設を夢見ている。
- ・プリヘーリヤ：ラスコーリニコフの母。息子を溺愛する信心深い女性。
- ・ドゥーニャ：ラスコーリニコフの妹。美しく、兄思いで、お金を得るため金持ちのルージンと婚約する。スヴィドリガイロフとも因縁がある。
- ・マルメラードフ：ソーニャの父親。真面目に働いていたが失業しその後酒に溺れる。信心深く家族思いだが行動を改めることができない。
- ・カテリーナ：マルメラードフの妻。裕福な階層の出身で、誇りを持っている。極貧生活の中で精神に変調をきたす。
- ・ルージン：ドゥーニャの婚約者。弁護士で裕福。ラスコーリニコフと激しく対立し策を講じるが…
- ・スヴィドリガイロフ：良心の欠けた悪党。裕福な暮らしをしている。ドゥーニャと因縁があり彼ら兄妹から嫌われている。のちに詳しく説明する。

### 4 自分はこう考えた（ここからネタバレ注意）

私がこの作品の登場人物の中で最も好きな人物はスヴィドリガイロフだ。まずはこの人物について詳しい説明をしよう。スヴィドリガイロフは女癖が悪く、また口が達者で、夫に貞操を捧げた人妻に言葉巧みに取り入り、関係を持つ。本文で断言されてはいないが恐らく妻を毒殺。金にものを言わせて16歳（この時スヴィドリガイロフは50歳）の美しい少女と婚約する。このように、非常に邪悪で、読者が嫌悪感を覚える人物であり、しまいには家庭教師として家に来た美しい少女ドゥーニャに惚れ手に入れようとする。一度断念したように見えたが、兄ラスコーリニコフの件で脅しドゥーニャを二人きりの密室に閉じ込め関係を迫る。がドゥーニャに拒絶され、自分は彼女の愛を受けることができないと知ると、彼女を解放し財産の一部を与え、「急用でアメリカに行かねばならない」とドゥーニャ及び婚約者に伝え、安宿で一夜を過ごしたのち拳銃自殺を遂げる。彼は間

違いなく唾棄すべき最低の人物であり、悪魔的な忌むべき悪党である。だが同時に私は、彼にどうしようもない人間臭さを感じた。娼館の淫蕩を好む一方、ドゥーニャやソーニャが持つ清らかさ、清廉さを敬愛し、それに愛されることを切望している。またこのような悪行を犯してはいるが、カテリーナの遺児たちの面倒を見たり（何やら打算的なものを感じるが）、自殺の前日に見た夢ではぼろぼろの服を着た幼い少女の世話をしたり、その少女が娼婦の顔をしたときは激しい嫌悪を感じたりする。このように悪党になりきれない部分があり、私はそこに人間臭さを感じる。私がこの人物を好きな理由である。彼は極端に死を恐れており、「死」という単語を聞くだけでいやだとラスコーリニコフに語るが、ソーニャに近づいたときには銃を向けられても怯える様子もなく近づいており、すぐ襲い掛かれる位置にも関わらず彼女が銃弾を装填するまで待っていたり、拳銃自殺の際にも躊躇いが見られなかったりする。彼は人よりも死に特別な思いを抱いており、「死を恐れている」というよりも、有終の美を飾れずに望まない最期を迎えることを恐れているのであって、それにより死を恐れているように見える、と私は解釈したが、どうだろうか。

次に、『罪と罰』を読んで抱いた問いについて何点か述べる。

一つ目は、新潮文庫の「あらすじ」ではリザヴェータを殺害したことにより罪の意識がころにのしかかったとあるが、本当だろうか。本文では金貸しの老婆（アリョーナ）の名前が出てくることはほとんどない。リザヴェータはソーニャと近い関係にある。リザヴェータ殺害のみが問題ならば、アリョーナ殺害はどうなるのだろうか。私はこの問いに対して、次のように考えてみた。ラスコーリニコフはもともと「人間は凡人と非凡人に分けられる。非凡人は凡人の道徳観等の線引きを越え、凡人を支配する権利がある」との考えのもと、自分を非凡人と思っていた。が、ラスコーリニコフは、殺人の後偉大な行動を起こさず、単に奪ったものと証拠を隠しただけで、それ以上何もできなかった。このことから、自分は非凡人ではない、ナポレオンにはなれない、と悟り、それゆえアイデンティティー・クライシスに陥り、熱病や狂気に陥った。殺害を自白したのも、自分が非凡人ではなかったと認めた結果だ。すなわちラスコーリニコフの思想自体は最後まで一貫しており、物語中では変わっていないのではないか。このように私は考察してみた。他方、ラスト近くで前述の思想を書いた論文を「下らない論文」とも言っている。これはただの謙遜なのだろうか、それとも彼の思想の変化を暗示していると解釈できるのだろうか。

二つ目は、シベリアに行った後かれは変わったのか、本当に魂の救済はなされたのか、という問いである。彼はシベリアで旋毛虫の夢を見た。これはデトックスであり、無神論の毒（大地と隔絶された、人工都市ペテルブルクの、アパートの屋上の、棺桶のような部屋で生まれた思想の毒）が抜けたことを意味しているのだろうか。またシベリアで川の向こうの遊牧民たちの、神に祝福された暮らしを眺めているとき、何とも言えぬ憂愁が彼の心を波立てていることから、彼に少しでも変化や救いの予兆がある、と読み取ることができるのか、あるいは遊牧民とは川で隔絶されているためかれは神の祝福を感じ取ることはできても自分が受け取ることはかなわない、彼は救われることはない、と読み取ることができるのか。

三つめは、旋毛虫の夢についてだ。旋毛虫の夢は何を暗示しているのだろうか。私は、この夢は神罰、および神による人類の選びであり、このことからラスコーリニコフに思想の転換が起こり、彼に再び信仰が宿るのか、と考えてみた。この夢では、アジアの奥地からヨーロッパに旋毛虫による疫病が発生し、人類が狂気に取りつかれ、互いに殺し合い滅亡する。ある特定の選ばれた純粋な数人の人のみが、新たな人種と新しい生活を創り、地上を更新し浄化する使命を帯びる。つまり新たなノアの箱舟、もしくは現代版のソドムとゴモラへの罰、というものだ。ラスコーリニコフはこの夢を恐れていることから、自分は選ばれない側だと自覚している。どちらも選民思想であることに変わりはないが、棺桶のような部屋にいたときの思想はナポレオンのような非凡人思想、無神論であるのに対し、このシベリアでの思想では神のお眼鏡にかなうような信仰心、つまり後天的な回心による選民論だ、という違いがある。しかしこの件についても、神罰ではなく選ばれた数人とは非凡人のことであり、ラスコーリニコフが怖がっているのは自分が非凡人でない（凡人である）ことを殺人事件で悟っているからであり根本的な思想の変化はない、と読み取ることでもできるのではないか。これを読んでいる諸君はどう考えるだろうか。

『罪と罰』を読んだことのある人は考察を、未読の人は是非読んでみることをお勧めする。図書館にもある。

余談だが、ラスコーリニコフの名前はロジオン・ローヌイッチ・ラスコーリニコフ。ロシア語ではrをpと書くため頭文字をとってppp、反対にすると666（悪魔の数字）となり、ラスコーリニコフはキリスト教、ロシア正教の破壊者だと考える学者もいる。また、ドストエフスキーはロマノフ王朝に逆らい死刑判決を出されているが、シベリアから戻った後も表面上は従順にしているが作中所々にロマノフ王朝への批判が隠されており、これはドストエフスキーの二枚舌だとする解釈もある。『罪と罰』でも、主人公はナポレオンを敬愛しているし（ナポレオンは帝政ロシアに侵攻した男）、ラスコーリニコフの名前は訳すと「ロマノフ王朝を斧で叩き割る英雄」となるという。作品中にドストエフスキーの二枚舌を探してみるのも楽しいだろう。またこの作品の楽しみ方としては、あらかじめ犯人がわかっているので、予審判事ポルフィーリイが犯人を追い詰めていく心理小説としても楽しめる。当時のペテルブルグを鮮明に描いた社会風俗的要素、ラスコーリニコフとソーニャという神に背いた者同士の愛の物語の要素、理性のみによる社会改革の危険性を説いた思想小説的要素など、様々な要素が入り混じった総合小説であり、様々な楽しみ方ができる。

長くなってしまったが、これを読んでくださった方に感謝したい。ありがとうございました。

（1年男子 R3年3月）

参考文献 工藤精一郎訳『罪と罰』新潮文庫、亀山郁夫『「罪と罰」ノート』平凡社新書、江川卓『謎とき「罪と罰」』新潮選書など